

熱狂の王

ドナルド・トランプ

マイケル・ダントニオ [著]

渡辺 靖 [解説]

高取芳彦 / 吉川 南 [訳]



CrossMedia
Publishing

THE TRUTH ABOUT TRUMP

THE TRUTH ABOUT TRUMP

Copyright © 2015, 2016 by Michael D'Antonio

Published by arrangement with St. Martin's Press, LLC.
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

All rights reserved.

解説 — 「ドナルド・トランプ」という怪物

慶應義塾大学SFC教授 渡辺 靖

米史上初の黒人大統領バラク・オバマの誕生に世界が湧いた2008年。オバマ氏が属する民主党はもちろん、共和党内からも米社会の成熟を誇る声が相次いだ。

あれから8年。「ドナルド・トランプ大統領」誕生の可能性を世界が危惧している。民主党はもちろん、トランプ氏が属する共和党内からも憂慮の声が絶えない。

わずか8年でこうも振り子が振れるものだろうか。

米国研究者として、一応の説明は可能だ。

今日、「米国が正しい方向に向かっている」と考える米国民は25%。「ワシントン（＝中央政界）を信頼している」国民はわずか19%。どちらも1990年代半ばとほぼ同じ水準である。この時期には、社会の閉塞感や政治不信を背景に、大富豪ロス・ペロー氏や右派のパット・ブキャナン氏といったアウトサイダー候補が大統領選で躍進した。今回、ワシントンの既成政治や職業政治家への憤りを背景に、公職経験のないアウトサイダー候補であるトランプ氏が旋風を巻き起こしたとしても不思議ではない。

90年代半ばと大きく異なるのは、中流層の先細りだ。2015年12月に発表された米ピュー・リサーチ・センターの調査によると、1971年には中流層の総数は下流層と上流層を合わせた数の約1.6倍だったが、2015年には僅かながら下回っている。米国の全世帯収入の合計に占める中流層の割合は1970年には62%だったが、2014年には43%へと減少している（上流層は29%から49%へと上昇、下流層は10%から9%へとほぼ横ばい状態にある）。一般的に、中流層の力が弱くなると社会全体としての余裕がなくなる。国内的には「他者」への寛容度が低下して排外主義的傾向が強くなり、対外的には国際関与に消極的になって孤立主義的傾向が強くなるとされる。

白人人口の減少も進んでいる。米国勢調査局は、2043年までに人口の50%を割り込むと予測している。とりわけ「プア・ホワイト」と称される白人労働者層の人々にとって、学校や職場でマイノリティーが優遇されている点は「白人への逆差別」と映っても不思議ではない。不法移民の福利厚生のために税金が投入されている点などは耐え難いであろう。「プア・ホワイト」の人々にとって、白人中流層を主体とした「古き良き米国」は過去の幻影になりつつある。

こうした人々の憤りや不安にニッチを見出したのがランプ氏である。アウトサイダー候補への期待は過去にも存在していたが、「白人中流層の転落」という新たな状況を前に、そうした期待がより先鋭化している。

不法移民を全員強制送還し、メキシコとの国境に高い壁をつくり、その費用をすべてメキシコに払わせる。米国の雇用を奪うとして自由貿易協定には反対。富裕層への課税強化や社会福祉の拡充には

賛成。同盟国への負担増要求……。トランプ氏のこうした主張は、従来の共和党の基本方針と相容れないが、「プア・ホワイト」の心には訴えるものだ。トランプ氏はそこに勝機を見出した。

加えて、共和党の自爆という側面もある。公民権運動が盛んだった1960年代以降、民主党がマインリティーを重視するようになると、白人労働者層は民主党を見捨て、共和党へと流れた。1980年の大統領選で共和党のロナルド・レーガン大統領を支持した彼らは「レーガン・デモクラット」の中核を成し、その後も、人工妊娠中絶や同性婚、銃規制など社会・文化面で保守的な政策を掲げる共和党を支持し続けた。しかし、次第に共和党は企業や富裕層の影響力が強くなり、富裕層向け減税、自由貿易協定、賃金引き下げ、社会福祉の削減、移民受け入れなど、およそ白人労働者層を蔑ろにするような政策を掲げるようになった。「プア・ホワイト」の怒りの矛先は、ついに共和党の指導部（エスタブリッシュメント）へ向けられた。

もちろん、「プア・ホワイト」の憤りや不安を受け止めようとするトランプ氏の姿勢は何ら間違っていない。しかし、トランプ氏には人種差別を根底に据えているかのような言動も少なくない。「プア・ホワイト」の支持を取り逃さないために粗野で乱暴な言動を容認（黙認も含む）すること、あるいはそれを政治的に利用することは、米社会にとってあまりにリスクの高いギャンブルと言わざるを得ない。

奴隷解放を宣言したエイブラハム・リンカーン大統領は「国民統合の党」としての共和党のアイデンティティを確立した。その後、バリー・ゴールドウォーター氏やリチャード・ニクソン大統領を経

て、レーガン大統領が「保守政党」としてのアイデンティティを確立した。共和党への衝撃度において、今起きている現象は「トランプ革命」とでも称すべきものかもしれない。しかし、その場合、共和党をどう「○○政党」と称すればよいのか未だ定かではない。ただ、われわれの知っている共和党は終わりを告げることになりそうだ。

その意味で、今秋の大統領選は極めて重要である。トランプ氏が大敗を喫すれば、共和党の指導部は胸を撫で下ろすかもしれない。しかし、僅差の敗北であれば、トランプ氏ないし「トランプ的なるもの」は、依然、影響力を持ち続けることになろう。今回のトランプ氏の予想以上の躍進ぶりを目の当たりにして、「プア・ホワイト」という鉅脈を掘り起こすべく、派手な言動に訴える候補者も出てくるかもしれない。

さらに言えば、中流層の転落という現象——そして、それと絡んだ反移民感情の高まりなど——は米国のみならず、先進国共通の課題であることは、英国のEU離脱の経緯を見ても明らかである。欧州では反グローバル化を掲げるナシヨナリストが躍進し、先行き不透明な時代ゆえだろうか、旗幟を鮮明に掲げた「強い指導者」が多くの国々で支持を獲得している。こうしたマクロな傾向が続く限り、米国内においても第2、第3のトランプ氏が台頭する可能性は否定できない。

このように、トランプ氏は今の米国において生まれるべくして生まれた候補者と言えるが、トランプ旋風を単に時代や社会の産物と見なすことは短絡的だろう。そこにはやはり「ドナルド・トラン

プ」という異才の存在がある。誰もが「風」を「旋風」に変えられるわけではない。

ピュリッツァー賞受賞者のジャーナリスト、マイケル・ダントニオ氏の手による本書は、その強烈な個性と生き様に迫った労作であり、巷にあふれるトランプ氏に関する評伝の決定版だ。昨年刊行された原著はハードカバー版にもかかわらず4万部以上売れ、各方面から高い評価を得ている。本書を読みながらトランプ氏に対する怒り、呆れ、驚き、同情……ありとあらゆる感情のボタンを押された。正直、押されすぎて摩擦感すら覚えたが、「ドナルド・トランプ」という怪物を理解するには、相当地な気構えが必要ということだろう。抜群の知名度がありながらも、実は断片的なイメージしか持たれていない現代米国の寵児を、日本の読者のみなさんはどう意味付けるのだろうか。

不動産やカジノの経営者のみならず、テレビの人気リアリティー番組の司会者としても一世を風靡したトランプ氏。今、まさにその本人が「挑戦者」としてホワイトハウスの館主の座を目指している。まさに究極のリアリティー番組を観ているかのようだ。本書を読めば番組の面白さも倍増するはずだ。と同時に、それが番組ではなく現実である事の重大さも再認識できるはずだ。

個人的には、大統領選が終わって一段落してから、改めて本書を読み直したいと思う。今後の米国は（良くも悪くも）「トランプ旋風」の呪縛から逃れられないと確信するからである。時代の証言として、本書は優れた価値を持ち続けるだろう。

2016年8月

まるで意地悪な女の子のように、 دونالد・トランプは二度と私と口をきかないと決めた。交渉で話をまとめる達人のはずの彼は、全7回のインタビューが5回目まで終わったところで、アシスタントを使って話をぶち壊した。その後はまったく話していない。理由は……彼が嫌っている人物と私が話をしたからだ。あの気性の激しさを考えれば、驚くことではない。

ドン（本人がそう呼べと言い張った）は、相手が自分の言うことを聞かないと機嫌を損ねる。そして機嫌を損ねると、その相手を死んだものと見なす。以前に本人が言っていた通りだ。「私に何かしてきたやつは、死んだのと同じだ。もう終わり。やり直しなどない。世界には何十億も人がいる。そんなやつらは必要ない」のだと。

数カ月経ったころ、電話が鳴り、発信者の欄に「トランプ・タワー」と表示された。大勢いるトランプの雇われ弁護士の一入、マイケル・コーエンだった。この本は間違いだらけに違うないので、原稿を見たいと言う。私が不正確な本を出さずに済むよう「手伝いたい」そうだ。私たちは、書籍づくりで事実確認がどのように行われるか、そして著者の独立性が読者にとつていかに重要かを話し合った。最終原稿を見せたら最後、トランプが共著者になるようなもので、都合のいい見方や偏見を押し

付けられるに違いない。訴訟を武器のように使うトランプのことだ、書き方を巡って裁判になる可能性も高い。

原稿が手に入らないとわかると、コーエンは質問を始めた。尋ねられたのは、ある女性有名人について書いたか、また、トランプが人種差別主義者だと書いたか、ということだった。回答を拒むとコーエンの声は低くかすれ、脅すような調子になった。法律の学位の持ち主だというのに、これではまるでドラマ『ザ・ソプラノズ』の主人公のマフィア、トニー・ソプラノだ。だが、どうにもならぬことを理解したらしく、コーエンは猫かぶりをやめた。

「本当にも何も見せないんだな」。いらついた口調だ。

「そのつもりだよ、マイケル」と私。

向こうは笑っているようだった。

私とやり合った後、コーエンは出版社の法務部門に電話攻勢をかけ、少なくとも一通の手紙を送りつけた。コーエンは「そっちがその気なら裁判だ」と言い切った。典型的なトランプ流だ。

トランプはそのキャリアを通じ、幾度となく訴訟をちらつかせては記者たちを脅してきた。それがあまりに頻繁なため、記者は「訴える」と言われないと、自分だけ無視されているのではないかと感じるほどだという。私との初対面のときも、トランプはちよつとしたやり取りや冗談まじりの会話を交わしながら、先々にこちらを訴えることを考えていた。

結局、提訴はされなかったが、それも驚きではなかった。数週間後、2015年6月の晴れた日に、

コーエンの雇い主はトランプ・タワーのロビーに報道陣を集めた。指定の時間になると、トランプは妻のメラニアの何歩も後ろからエスカレーターで降りてきて、大統領選への出馬を表明した。コーエンが電話してきたのはこのためだ、と思った。トランプがどう描かれるのかが心配で、牽制のためにちよつと脅しをかけておこうと考えたのだろう。

脅しは、昔からトランプの常套手段だ。たとえば、大男たちを雇い、武器を持たせてオフィスの待合室にこれ見よがしに——筋肉や武器を見せつけるような様子で——立たせたり、外出に同行させたりする。これはトランプが何十年も続けてきた習慣だが、少なくとも、大手企業幹部の行動としては一般的ではない。しかし、トランプはいつも護衛チームを指差しては、元警官や元刑事として鍛えられた連中だと自慢する。もちろん、「もし殴り合いになったら勝ち目はない」と相手に感じさせ、恐怖心を植え付けようとしているのだ。

トランプは、アメリカ史上、最も奇抜と言えそうな選挙戦を展開する間、たびたび人間の恐怖心を利用した。不法移民を痛烈に批判して数百万人単位で強制退去させざるべきだと言ったり、イスラム教徒を罵倒して入国を禁止することを主張したりした。大統領候補のトランプにとつてタブーはないも同然で、アメリカの殺人統計に関する人種差別的なデマをリツイートしたこともある。実在しない「犯罪統計局」を出所とするその偽の「データ」では、白人のアメリカ国民が殺された際に、その加害者の81%が黒人だとされていた（FBIの2014年の統計によれば、実際は白人被害者の82%が

白人に殺されている)。

この嘘の情報でトランプが人種差別をする数日前には、アラバマ州バーミングハムで開かれた集会で、彼の演説を遮った反トランプ派の黒人にトランプ支持者が殴る蹴るの暴行を加えていた。トランプは(明らかに誰かれかまわずといった様子で)「そいつをつまみ出してくれないか。つまみ出してくれ。放り出せ!」と声を上げた。トランプ陣営の広報担当者はCNNに対し、陣営は「この(暴力)行為を見過ぎさない」とコメントしたが、トランプ自身の考えは違った。「あの男は痛い目に遭って当然だ。なにしろひどい態度だったからね」と言うのだ。別の集会では、マイクを通してたった一人の抗議者を排除するよう指示した。トランプはこれについて「警備員たちは彼を非常に丁寧に扱った」が、自分は「正直言つて、顔面を殴りつけてやりたかった」と語っている「1」。

トランプの選挙演説は、原稿も特段の準備もなく行われ、政策が詳しく語られることはない。熱狂的なファンのために演じられる無料のコメディーショーのようなものだ。彼はそこで政治家たちをこき下ろし、ジャーナリストを悪者扱いし、支持率調査でライバルを上回ったと自慢する。すべてが毒舌で笑いを取るコメディアンのようにテンポよく展開される。2016年1月20日にサウスカロライナ州の集会で行った演説を見てみよう。『カンザス・シティ・スター』紙によれば、次の通りだ。

ジェブ・ブッシュ[※]の話をしよう。やつは選挙戦に5900万ドル使っておいて、今じゃ墓の下だ。どこにもいない。いやいや、考えてもみてくれ。もつとうまくやれたはずだろう。5900万ドルだぞ。

広告といえばトランプのものしか目に入らない。しかも、なかなかいい広告だ。

〈笑い声〉

どうせ広告を打つなら、宣伝しないと意味がない。だが、やつは低エネルギー人間のようですね。率直に言おう。エネルギーが足りないやつなんていらぬ。エネルギーは大量に必要なんだ。

〈歎声〉

それなのに、やつが使った金は……いくらだ。5900万ドル。一方、私はまったく金を使っていない。まったく、だ。

〈歎声〉

だが、これからは使う。君たちもすでに予想していたかもしれないが、これからは金を使う。大金をつぎ込む。念には念を入れるためだ。私はもともと立ち上がるのが好きなタイプの人間だ。そして立候補から数カ月間、実質的にトップを走ってきた。しかも最近は……大差でリードしている。ぜひともこの話をしておきたい。調査結果をチェックしているものでね。世論調査はいい。大好きだ「2」。

圧巻の事実歪曲ぶり、支離滅裂な話しぶり、そしていつものように感情的なスタイルだ。トランプの選挙戦はありきたりの政治分析をはねつける。自身の莫大な富、優れた知性、すべてにおいて「勝利する」という生来の能力について語る彼は、正式な大統領候補者というより、ハリウッドのコメ

デュー映画の登場人物のようだ。柔軟に表情を変え、嫌悪や怒り、憤り、満足といった感情を表現し、身振り手振りで強調したい点を示す。体に障害のある記者の話をするときには、その記者のしぐさを真似して馬鹿にする。また、対立候補のマルコ・ルビオが討論会で汗だくになったのをからかうため、水をまき散らしてからペットボトルの水を飲み干して見せたこともある。

この水飲みパフォーマンスがウケたのは、現職の上院議員であるルビオまでが同レベルの「口撃」を始めたのを聴衆が知っていたからだ。トランプが3州での予備選で勝利すると、大きく遅れを取ったルビオは2016年2月、スピーチにトランプの技を取り入れる。聴衆の前に、テレビ討論の休憩時間中のトランプについて、「等身大の鏡を持って来いと言った。(中略)小便を漏らしていないか確かめるためだろう」と話したのだ。これが今回の選挙戦のありさまだ。いい大人が、誰かが汗だくだったあの、誰かが小便を漏らしたのだのと騒いでいる。しかもそれがますます激化しているのだ。

対立候補たちとともにアメリカ最南部の有権者に支持を訴えたとき、アメリカの政界で最も有名な人種差別主義者とも言えるトランプは、アメリカの白人が彼に反対することは「自分たちの立場に對する裏切り」だと発言した。

黒人・ユダヤ人・カトリックなどを幾度となく恐怖に陥れてきた白人至上主義団体、クー・クラックス・クラン(KKK)の元最高幹部に、デービッド・デュークという人物がいる。2000年、トランプは当時所属していたアメリカ改革党を脱退する理由を説明した際、自らデュークの名前を出し

て、「偏狭な人種差別主義者の問題人物」と呼んだ。

しかし2016年、アメリカ最南部での予備選を前にした彼は、デュークが誰だか思い出せないようだった。さらに、白人至上主義運動の何たるかを理解していないとも言った。CNNテレビのジェイク・タッパーとの生インタビューで、「白人至上主義や白人至上主義者という言葉を使われても、あなたが何を言おうとしているのかわからない……わからないんだ。その人物が私を支持したか何かしたのか？ デービッド・デュークのことなど何も知らないし、白人至上主義者のことも知らない」と語ったのだ^[3]。

人種差別団体からの支持をはっきりと拒否しなかったばかりか、かつて自分が「偏狭」と呼んで非難した人物のことを知らないと言い張ったのである。これを受け、共和党内でも反発が起きた。ウィスコンシン州選出のポール・ライアン下院議長は「共和党の指名を受けなければ、逃げることもふざけることも許されない。偏狭な団体や運動からの支持は、どれも拒まなければならない。わが党は人々の偏見を利用したりはしない」とコメント。論争が加熱すると、トランプは、自分が過去に何度かデュークとの関与を否定しているという点を指摘した^[4]。

この論争はマスコミを大いに騒がせ、当然ながらトランプが好意的に取り上げられることはなかった。それでも彼は大衆に向けて語り続け、3月最初の火曜日、11州で投票が行われる「スーパー・チューズデー」で7州をもにした。共和党主流派の幹部は、11月の本選挙を「過去数十年で最も対立含みの候補」の下で戦う可能性と向き合うことになったのだ。そうなれば、大統領選に負けるばか

りか、連邦上院の支配権も失う恐れがある[※]。この悪夢のような未来予想が現実となれば、党が自壊し、嵐の海に飲まれた船のように沈んでしまうことも考えられる。

人々の「恐怖」「怒り」「疑念」を利用した予備選挙

トランプ陣営は、現在の政治システム——選挙活動に大金を寄付した者たちが支配するというシステム——に疑いを抱いている人々、さまざまな恐怖にさらされている人々の不満と怒りをうまく利用し、選挙戦を勝ち抜いてきた。

トランプが利用した恐怖は、次のようなものだ。

- ・イスラム系テロリストに対する恐怖——トランプは、イスラム教徒のアメリカ入国を一時的に禁止し、中東で大規模な軍事行動を始めるべきだと主張している。
- ・失業の恐怖——メキシコからの不法移民1100万人を国外退去処分とし、国境に巨大な壁を築き、メキシコにその費用を払わせるべきだと言っている。
- ・犯罪の恐怖——本来は大統領が命令できることではないが、トランプは死刑の適用対象を広げる道を探るつもりだと語っている。
- ・グローバル化の恐怖——中国やメキシコと貿易戦争を始めるべきだと言っている。

また、トランプは人々の怒りと疑念を利用するために、次のような手段も取った。

- ・元戦争捕虜やジョン・マケイン上院議員の軍での功績を馬鹿にする。
- ・気候変動は嘘だと言いつ切る。
- ・2001年9月11日の同時多発テロで、ニュージャージー州の「何百万もの人々」が世界貿易センタービルの崩落に歓声を上げたという嘘を広める。
- ・記者を「極めて不愉快。まったく不誠実な連中」と呼び、悪人扱いする。

トランプの主張は、彼が急ぎで仕上げた選挙戦マニフェストをまとめた書籍『Crippled America (機能不全のアメリカ)』と、彼のスローガンである「アメリカを再び偉大にする」に集約されていると言えよう。彼が開く集会では、参加者が、かつてニクソン大統領が用いた「サイレント・マジョリティ」という言葉が書かれたプラカードを振る中、「われわれの国を取り戻す」という文言が繰り返し唱えられる。この光景からわかるのは、外国勢力によって国を乗っ取られ、声さえ奪われ、力を失ったと感じているアメリカ人が、数百万人規模にいるということだ。そんな人々は、トランプの言葉の中に自分の声があるのに気づく。マサチューセッツ州エバレットのトランプ支持者、パトリシア・アギラーは『ニューヨーク・タイムズ』紙に対して、トランプは「人々が本当は感じている」のに「恐れて誰も言えずにいる」ことを表現しているのだ、と語った^[5]。

トランプ特有の弁舌と派手なスタイルに触発され、多くの人が彼の集会に殺到した。テレビのプロデューサーは他の候補者よりはるかに長い時間をトランプに割く番組づくりをする。彼が映れば視聴率が急上昇し、あまりの効果に、自分を利用してテレビ局が大儲けしているとトランプが不満を言い出すほどだった。

また、インターネット上では数千人単位の支持者のグループができ、虚偽のニュースを共有し、宣伝活動を行った。画像加工ソフトを使ってトランプ支持者の写真を偽造したポスターもつくられた（黒人男性がトランプ支持のスローガンを印刷したTシャツを着ているというつくりものの画像もある）。さらに、ブロガーたちが『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙や『ニューヨーカー』誌の有名記者の署名を使って偽記事を書くこともあった。インターネット上の無法空間ではそんな嘘も許容されると考える人が多いのだろう。トランプ本人のソーシャルメディアへの投稿も同じだ。しばしば嘘や事実の歪曲があったり、怒りにまかせて書かれていたりする。ある支持者が、オンライン掲示板サイトの「Reddit」に明らかに賞賛する調子で書き込んだ通り、「毎日毎日まったく同じように、彼はクソ投稿ばかりしている」のだ^[6]。

従来型の政治家には、「クソ投稿」によって熱心な支持者が一つにまとまり、そのうち外部から真実を提供されてもそれに目を向けなくなるといふ現象が理解できない。こうしたトランプ支持者のグループ内では、外部の批評家たちに対しては誰であれ、耳を貸す価値がないと見なされる。

この「パラレルワールド」に息づく力に気づかず、世論調査会社や報道関係者たちは、何カ月もの

間、トランプを過小評価していた。

2015年6月、ラジオ局NPR (National Public Radio) のマラー・リアソンは「今日がドナルド・トランプにとって最高の日でしょう。この先は無視されると考えています」と言った。11月には『USニューズ・アンド・ワールド・レポート』誌のトップ政治記者が「トランプのリードは徐々に詰められていく」との見通しを示し^[7]、統計学者のネイト・シルバーはマスコミに、トランプの支持基盤は有権者の8%にも満たないのだから「大騒ぎ」はやめたほうがいいと助言した^[8]。2016年1月末に予備選の賭けを募ったブック・メーカーは、マルコ・ルビオを本命としていた。

しかし、トランプがニューハンプシャー州の予備選で20ポイント差をつけて勝つと、専門家たちにも彼が持つ力の真実が見え始める。トランプはサウスカロライナ、ネバダの2州でも勝利した。スパー・チューズデーで11州のうち7州をもにすると、候補者指名が現実味を帯びた。数カ月前には考えられなかったことが実現し、共和党の主流派は、トランプを指名するという筋書を避ける道を必死になって探り始めた。彼らは、トランプは、中核的な支持者こそ集めているものの、民主党の指名が濃厚なヒラリー・クリントンに勝てるほどには中間層や民主党支持層を引き寄せられないだろうと懸念したのである^[9]。

党幹部たちが不安を抱いたのは、2012年の大統領選に敗れた後の正式な事後研究で、共和党敗北の原因は国政選挙で当選する際の鍵となる特定の大きな層——ラテンアメリカ系・黒人・女性・ア

ジア系など——を敵に回してしまったことにあるとの結論が出ていたからだった。

トランプはこれらの層の有権者を共和党からさらに遠ざけていたため、党を長年率いてきた幹部たち、とりわけ12年の選挙でミット・ロムニー候補の陣営にいた幹部たちは危機感を抱いた。その一人、ケビン・マッデンは、トランプは「人間性をテストするリトマス試験紙」のようなもので、彼を支持することはそのテストの落第を意味すると言った¹⁰。また、同じくロムニー陣営にいたスチュワート・ステイブンスは、民主党のヒラリー・クリントンのほうが大統領にふさわしいのでクリントンに投票すべきだと呼びかけた。さらに上院議員に立候補したことのあるメグ・ウィットマンは、トランプを「不誠実な扇動家」と呼んだ。

その後もトランプが勝ち続けると、共和主流派の中でそれまで落ち着いていた面々も、彼が党のトップに就くのを阻止するために団結した。予備選で、それが無理なら党全国大会でその流れを食い止めるため、ロムニーらが率いる「トランプ以外の誰か」の勝利を目指す同盟が結成された。党大会では手続き上の規定を利用してトランプ降ろしを実行できる可能性があったからだ。ロムニーは「不誠実がトランプの本性だ」と述べた（トランプは仕返しに、「2012年に会ったとき、自分の支持を得るためにロムニーがオーラルセックスをした」という冗談を言った）。

また、保守系『ウィークリー・スタンダード』誌の編集長のウィリアム・クリストルは、共和党候補の代わりに無所属か第三極の大統領候補者を支援する意向を表し、バージニア州選出共和党議員の

スコット・リゲルは「彼に投票できないだけでなく、彼が勝ち進むのを黙って見ていることもできない」と語った「U」。ほかにも、同じような意見を述べた共和党の外交政策専門家が60人いた。多くが外交官や大統領顧問の経験者で、トランプは世界におけるアメリカの立場を脅かす存在だと批判した。

2016年の初めには、ニューヨーク郊外のわが家を訪れる報道番組のスタッフや特派員たちが、トランプに関する不安を口にするようになっていた。彼がアメリカの国益を損ねかねないというよく認識した外交専門家たちは、そうした報道関係者から教えを受けることになる。韓国KBSテレビのソ・ヨンハ特派員のように、多くの人がすでにトランプの集会を取材していた。集会でトランプが記者たちを指差して「クズ」呼ばわりすると、支持者たちはブーイングと舌打ちでそれに応じる。熱心な支持者が抗議者をつかんで無理やり集会から排除するところを見た人もいる。

ドイツから来た3人の記者は、それぞれ別の機会に私の下を訪れたにもかかわらず、全員がトランプは「ナチス」に見えたと表現した。そしてどの記者も、何が起きているのか私に説明してほしいと言い、詳しい分析を求めた。

トランプは人種差別主義者か？

トランプは精神疾患の持ち主か？

トランプは悪人か？

ドナルド・トランプを形づくったもの

トランプと違い、私は簡単に断定はしない。しかし、トランプを研究し、筋道立てて考察を導き出すことはできる。私はトランプの私生活・事業・政治活動などを調べるといふ仕事に3年を費やした。そして、どういった経験から、また何の影響によって、横暴・狡猾さ・欺瞞・誇大妄想といった特性を備えるようになったのか、その答えと言えそうなものを見出した。

トランプは、私たちがどのような人間になるかを決めるのは、遺伝子と幼少期の経験だと考えている。彼の母親は注目を浴びたがり、社会的地位にこだわる人だった。また、金への執着が強く、トランプ社のビルの地下にあるコインランドリーを一人で訪れては、洗濯機や乾燥機からコインを集めるほどだった。さらに、トランプが幼いころはほとんどいつも、病気を抱えていた。

一方、トランプの父はというと、多くの人の話から、極めて厳格で多くを求めるだけでなく、気取り屋で、狡猾な手口や欺瞞に長けた人物であることがわかった。また、復員軍人や中間所得層に住宅を供給するためのプログラムを利用して不当な儲けを手にしていたことが、政府による二度の捜査で暴かれている。

ドナルドの父、フレデリック（フレッド）・トランプが成し遂げた最も創造的な仕事は、量産型住宅の建設ではない。政府の補助金を受けておきながら、その使い道を隠すため、関連会社を網の目のように張り巡らせたことだ。公聴会に呼び出されたフレッドは、自らの欲深く不適切な行いについて説明し、「制度が自分にそうさせたのだ」という何とも倫理にもとる説明を展開した。フレッドに言

わせると、法律の枠内に収まってさえいれば、納税者が支える住宅供給プログラムの精神を侵しても問題ないということだった。

フレッドは夜遅くに家で仕事をすることもあったが、その様子にも彼の価値観がはっきりと表れていた。電話の相手より少しばかり優位に立つため、別人のふりをすることもあった（そういうときはいつも「ミスター・グリーン」と名乗っていた）。

また、子どもたちには、非情なまでの競争心と闘争心を持って教えた。ドナルドには、お前は「食う側」になり、「王」になるのだと言いつけさせた。そして、将来の王にふさわしく、運転手付きの大型リムジンで新聞配達の仕事させた。ドナルドが口喧嘩の絶えない、いじめっ子体質で暴力的な少年になったのも当然かもしれない。

ドナルドは名門私立学校、キュー・フォレスト・スクールに入学し、毎日子ども用のコートを着て、ネクタイを締めて通った。しかし、結局この学校も、落ち着きがなく言うことをきかないドナルドを改心させることはできなかった。時折、家族とマーブル・カレッジエイト教会の礼拝に参加して宗教的な教えを受けたが、それでもドナルドは変わらなかつた。教会ではノーマン・ビンセント・ピールという牧師が、商売の営みは信仰とともにあり、野心もまた神への賛美の一つの形だと教えていた。ピールは罪や道徳的義務についてほとんど話さず、その一方で、ジョン・F・ケネディーが大統領になることに反対して反カトリックを唱えていた。彼に従う信者はカルト的な集団を形成し、ピールが

『積極的考え方の力 (The Power of Positive Thinking)』という本で示した教えに傾倒した。

ドナルドは学校外での体験によって優越感を高め、学校では同級生や教師に嫌がらせをした。8年生になると、実家から離れた全寮制の男子校ニューヨーク・ミリタリー・アカデミー (NYMA) に入られ、制服を着て、狭い相部屋に押し込まれて過ごすことになる。親も友人も、父の豪邸もない。あるのはヒエラルキーと、権威主義的な厳しい規律でできた社会だ。NYMAの大人には第二次世界大戦の退役軍人が多く、肉体、精神の両面で荒々しく生徒たちを管理した。ドナルドから聞いたところによると、「連中はいつも生徒をぶん殴っていた」という。

ドナルドはNYMAで、弱い者が虐げられるのは世の習いだと確信し、競い、勝つことがすべてだという考え方を強めた。「マジエ^{*}」と呼ばれていた恩師のテオドル・ダビアスは私に、食堂の列をはじめ、ドナルドは何でも一番になろうとしたと語った。またドナルドの父については「本当にあの子に対して厳しかった。すごくドイツ風だった」と振り返った。

NYMAでドナルドは、マフィアの息子や、ラテンアメリカの独裁者たちを父に持つ生徒と一緒に学んだが、黒人やアジア系の生徒はいなかった。また、ドナルドが最上級生になった年に慣習のないじめが激化し、上級生から鎖でムチのように打たれた下級生が入院する事件まで起きた。その後、暴力的な校風が学外に知られ、学校の幹部3人が辞任している^[12]。

NYMAで充実した日々を送ったのち、ドナルドは商業専門学校に通うような感覚で大学時代を過ごす。週末にはいつも実家に戻り、家業の見習いをした。そこで彼は、父が寄付金によって政治家を

操り、人脈を駆使して儲けを重ねていく姿を目にする。またこの間、貧困層・マイノリティー層の若者たちがベトナムで戦い、命を落としていたが、ドナルドはちよつとした健康上の問題を理由に徴兵を逃れている。彼の尖った踵かかとの骨は、スポーツに支障はないものの、どういふわけか戦闘行為には差障ったということだ。

大学卒業後、ドナルドはマンハッタンに住み、欲と欺瞞と腐敗に染まった土地を見て回る。そして、本人いわく、セレブリティが集うディスコ「スタジオ54」周辺での狂乱を見て、ニューヨーク政界の腐敗ぶりを目の当たりにする。ドナルドの回想によれば、ヒュー・ケアリー州知事は選挙資金の寄付を受けるためなら「何でも」したという。

最も早い時期からドナルドと協力関係にあった人物に、マフィア弁護士のロイ・コーンがいる。コーンは人種差別的、そして自身がユダヤ人であるにもかかわらず反ユダヤ主義的な言動で知られた人物だ。コーンから学びながら、ドナルドはすぐに、マスコミを操り、偽の成功イメージを築く能力を示す。少し手を回すだけで、『ニューヨーク・タイムズ』に好意的な記事を書かせ、ハンサムで優秀なドナルド・トランプ像をつくり上げたり、テレビのトーク番組の関心を引いたりできた。マスコミはそれが真実かどうかより、とにかく「面白いストーリー」を欲した。ドナルドが写真映えるのもまた功を奏したのである。

そして至るところでドナルドは、古くさい良識に背く人々が得をしているのを目にする。1970年代のニューヨークでは、新聞のコラムニストたちは何らかの利益と引き換えに取り上げる話題を決

め、マフィアたちがスポーツ界のスターに匹敵するセレブのように扱われていた。忠誠心や誠実さは過去の遺物だった。ドナルドはキラキラと輝くドブのようなその世界で、人間とは本質的に欲得で動く生き物だと確信する。我欲と自己愛を表に出せば出すほど、ドナルドは人に好かれるようになった。ドナルドがゴーストライターを雇って書かせ、自ら著者を名乗った本はベストセラーになった。一人目の妻を裏切ったときにも、ドナルドはそのことを隠そうとしなかったが、やがてスキャンダルに発展し、子どもたちが馬鹿にされ、蔑あはまれることになる。

ドナルドの会社は4回の大きな破綻を経験し、無数の事業で失敗した。また、数え切れないほどの訴訟・報道・個人の証言が、ドナルドと彼の会社トランプ・オーガニゼーションによって、数千人の投資家・顧客・関係者が損失を負わされてきたことを示している。

そして2016年、ドナルドは大統領候補になった。

大統領候補の彼は、理想に欠け、権力をつかむという意志以上のものをほとんど示していない。共感と倫理という固い基盤がない中、人種憎悪を利用し、女性嫌悪を増幅させ、暗黙のうちに暴力を奨励している。選挙が近づくにつれ、彼の人間観がますます明らかになっている。今、答えを出すべき重要な問題は、ドナルド・トランプのことではない。彼の内側に何があるかは明らかだ。しかし、アメリカの内側に何が巣食っているのかは定かではない。

熱狂の王 ドナルド・トランプ ◎ 目次

解説——「ドナルド・トランプ」という怪物 3

はじめに 8

フロローク 30

第1章 クロндаイクからブルックリン、クイーンズへ 46

第2章 少年王ドナルド 57

第3章 見習い時代 70

第4章 恐怖都市 84

第5章 ドナルド、ミッドタウンを救う 111

第6章 トランプ、タワーを建てる 132

第7章 セレブへの仲間入り 152

第8章 だまされる者の国のトランプ 166

第9章 運の尽き 183

第10章 トランプ、見世物になる 222

第11章 ニュー・トランプ 241

第12章 トランプ、出馬する 253

第13章 トランプ、テレビショーに出演する 269

第14章 「私の美点の一つは……」 292

第15章 その悪評は海外でも 313

エピソード ドナルド・トランプを理解するために 339

註記 370

参考文献 380

※本文中、「1」「2」「3」……は巻末註記の参照番号を示す。